

草の芽句会だより

NO, 185
24、2、1

水抜きし寒のお濠に鷺一羽
紙漉きや手を添えくるる土佐の旅

純子

大手門くぐれば静か寒の雨
能登半島地震の瓦礫雪積る

貞子

御殿門くぐりて雨の初句会
おしゃべりもしたくて八十路初句会

範子

つぎつぎに仲間の減りし初句会
友逝きぬ初売ひとり出かけけり

禮子

野仏に添ひ山吹の帰り咲き
掃き寄せし落葉の濡れて大手門

剋子

教わりつつ紙雛つくる楽しさを
野に出でて菜の花の道巡りゆく

節子

出席者 森 川原 吉崎 馬場 小山
投句者 氏家

新しい年が始まった。今日は初句会である。雨もよいのせいか城山は人影もまばらで静かたたずまいである。いつもの径は綺麗に掃かれていて新年を感じる。椿の森では深紅の花が雨に濡れ、いっそう鮮やかな紅色である。寒さの中、皆を楽しませてくれた椿もまもなく終わる。深紅の小さな花が、なんだか愛おしい。

出席者は会を重ねる度に少なくなってきた。今日は五名である。体調を崩したり、亡くなられた句友もいる。淋しいことであるが、我々の年齢を考えると無理からんことかも。それでも賑やかさはいつもと変わらない。「月に一度の城歩きは楽しいなあ。何十年も歩いてきたけど飽きる事が一度もない」「ガイドがやれるかも?」「みんななどのお喋りが一番の楽しみやわ」「私もそう思うで」と。

大手門へ向かう途中の市民広場で、永井先生の句碑を訪ねることも楽しみのひとつである。「俳句は感動することが大事ですよ。感動無くしては句は生まれませんからね」句碑を訪う度に先生のお言葉が耳に蘇る。そして久しく感動を覚えなくなっている自分に気付く。今年は感動を求めて、みんなで元気に城山を歩きたいと思う。

